

シュトルムの『後見人カルステン』

西 野 雅 二

岡山理科大学教養部

(1991年9月30日 受理)

はじめに

シュトルムは、後期の作品においては人間の動き、社会の動きを写實的に描き、悲劇的な小品を残している。その代表的な作品としてあげられるのが死の直前に書き上げられた『白馬の騎者』(Der Schimmelreiter)である。ここでとりあげる『後見人カルステン』(Carsten Curator)もそのような作品のうちの一つであるが、そこでは父親カルステンと息子ハインリッヒとの間の父子関係が主要なテーマになっており、これが悲劇を形作っている。¹⁾

シュトルムにとっては長男のハンスは頭痛の種であった。ハンスが永年をかけて医学の勉学に取り組んではいるものの、試験に合格できずにおり、また酒で身をくずしかねないような状況にあったため、シュトルムはその何年も前から心から楽しく思えるような日々がなかった。『後見人カルステン』はこのような悩みを抱いている時に書かれた作品であり、これをシュトルムはゲーテにならって、自分自身の苦悩を和らげるために、自分を苦しみから解放するために作品化したとエーリッヒ・シュミットにあてて書いている。²⁾この小論では、悲劇を生じせしめることになったカルステンとハインリッヒの父子関係について考察を進める。

I

先ずここで内容の検討をするに先だって、作品の概要を記すことにする。

主人公のカルステンはもともとはカルステン・カルステンズという名前であったが、若い頃から読書に親しんでおり、分からないところがあればこの男に聞けばいいという程の評判となり、そうしたことから、多くの未亡人や独身女性の財産管理をする後見人となっていた。そして、自分自身の利益にこだわることなく後見人としての職務を遂行していたので、世間からは「後見人カルステン」と尊敬の念をもって呼ばれるようになった。

このカルステンが、後見人としての依頼主であるユリアーネと結婚する。この物語の展開している時期は大陸封鎖の時であり、舞台となっている小さな港町³⁾は、デンマークの将校やフランスの船員に加えて多くの投機業者であふれていた。ユリアーネは投機に失敗し倉庫で首をつって自殺した投機業者の娘である。当初カルステンはユリアーネの依頼を「私はこの連中とはかかわりあいたくない」(Ich will mit den Leuten nichts zu tun haben.)⁴⁾

と言って断わるが、再度の頼みのため引き受ける。この仕事に、40歳のカルステンは美しいユリアーネの笑っている目に魅了され、2人は結婚することになる。そして、ユリアーネはハインリッヒを産むとすぐに死亡する。

長じたハインリッヒは、カルステンを後見人とするアンナと結ばれる。母方の血を強く受け継いでいて、母ユリアーネによく似ているハインリッヒは、父のように堅実な生活を送るのではなく、時には勤務先の金を使い込み、また新規の事業を起こしては失敗する。嵐が荒れ狂い、高潮が小さな港町を襲っている日に、ハインリッヒは酒に酔いながら、破産をまぬがれるために、カルステンが管理をしている妻アンナの財産を渡してくれるようにと父に助けをもとめる。父に拒絶されたハインリッヒとおぼしき男が洪水の中で水面から顔を出している杭につかまり、父の名を呼び、助けを求めている。しかし、この男は力尽きて水に飲み込まれてしまう。この様子を目撃したカルステンは卒中になって倒れる。卒中のため頭に障害が残ったカルステンは子どものようにになってしまう。高潮はこのようにしてカルステン一家に悲劇をもたらす。

II

作者シュトルムはこの作品の結末において、水に沈んでいく男を見たカルステンに卒中の発作をみまわせ、さらにはハインリッヒがああ夜中にも、また後になっても家に帰っては来なかったし、人に見かけられることもなかったと記すことによって、その溺死者が他の何者でもなくハインリッヒであると感じさせている。このようにシュトルムの作品における登場人物の悲劇的な死は、ほとんどすべてが「水」と結びつけられている。⁵⁾気候の温暖な日本においては、水は恵みの雨に象徴されるように大切な、人間に愛されるものであるが、厳しい自然の中で猛威をふるう北の海に面した小さな港町にあっては、水は高潮となって町を襲い、人の命を奪い去っていくものである。シュトルムの作品からいくつかの例を挙げると、『水に沈む』(Aquis Submersus)では子どもが溺死しているし、『ハンスとハインツ・キルヒ』(Hans und Heinz Kirch)では服や腕から水をしたたらせている息子の姿を父親ハンスは見たと感じる。『白馬の騎者』(Der Schimmelreiter)では、嵐の夜中に堤防監督官である夫ハウケの様子を心配した妻が、決壊した堤防を乗り越えて押し寄せてくる水に子供ともども飲み込まれ、それを目撃したハウケも馬とともに水の中に飛び込んでいる。

III

上でみたように、嵐の夜以来もどってきていないハインリッヒが、すなわち杭につかまって力尽き、水に沈んでいったあの男であると考えよう。それでは、このような悲劇がどうして起こり得たのであろうか。この作品においても『水に沈む』の場合と同じように、「父親の罪ゆえに」(Culpa Patris Aquis Submersus)⁶⁾子供が水に溺れて死に至るの

である。そしてここにおいては、一つには父親カルステンの持っている性格に、そして二つ目にはカルステンのユリアーネとの結婚に、ハインリッヒを死に追いやるカルステンの罪を見いだせないであろうか。

まず、この悲劇を引き起こすもととなった父親カルステンの性格を見てみよう。カルステンはもの思いにふける傾向があり、他の北フリースラント人たちと同じように頭脳労働にむいており、若い頃から読書を好んでいた。これはどちらかといえば内向的な性格ということになる。このような性格の場合、一般に対人関係においては消極的で、引っ込み思案気味であり、社交性に乏しく、孤独を好む傾向が強い。さらに、むやみに人と同調することがなく、自己主張をし、周囲の状況や事情に左右されず、自分の考えを押し通す。良く考えて行動する慎重深さ、用心深さもこの性格に特徴的なものである。⁷⁾

カルステンのこうした性格の良くあらわれているエピソードがある。ある日、牧草づくりの小作人がカルステンのところへやってくる。この男は、数年前からその当時の値段としては安い値でカルステンから土地を借りているのだが、誓って断言することに、翌年はこの値ではやっていけず、値下げをして欲しいというのである。カルステンが断わると、その男はこれまでの値でいいと言うが、それもカルステンは断わる。そうすると、これまでよりも高くなっても仕方が無いと言う。カルステンはこの男には頑として貸し与えず、以前に貸して欲しいと頼みに来たことのある別の人に安い値段で貸すことにした。作者の言葉によれば、カルステンは口数が少なく、決断がはやく、さらに下卑な目論見を感じるような場合には頑として聞き入れようとはしないのである。こうした仮借のない態度は、破産を目前にした息子ハインリッヒの要求をしりぞける伏線ともなっている。

もう一つの場面を見てみよう。父親を亡くしたユリアーネの依頼を引き受けたカルステンはその仕事に、ユリアーネから、喪服を着ていてダンスを踊れないなんて退屈だ、着替えることは出来ないだろうかとたずねられる。これに対してカルステンは駄目だと言うが、それはユリアーネがカルステンの厳格さに気付くほどの断わり方であった。

このようなカルステンの厳格さがハインリッヒを破滅に至らしめる一つの要因となっている。

11月の初旬のある日の午後、強風が吹き荒れ、濁った水が量を増して港町へと押し寄せてきている。この日の午前中に、アンナは夫ハインリッヒの窮状を救うために自分自身の有価証券を渡してくれるようにと後見人であるカルステンに頼む。正当な理由のある彼女にもその財産の引き渡しを拒絶する。「彼の石でできた家は持ちこたえるだろうが、彼の家の別の意味での没落、防ぎようのない没落が彼の心に浮かぶ」(Sein Haus, das steinerne, würde schon stehenbleiben; ein anderer Untergang seines Hauses stand ihm vor der Seele, dem er nicht zu wehren wußte.)⁸⁾のである。自分が管理しているアンナの財産を彼女自身に渡すことは、それすなわちもはやどうしようもなくなっている息子のハインリッヒに渡すことと同じであり、カルステンには出来ないことである。自分の家は息子とと

もに沈み没落する運命にあると感じている。

アンナが帰ったあと、夕方になってハインリッヒが「明日にも倒産する」と言って父親に妻アンナの財産を渡してくれるように頼みにくる。しかし、「お前の父親だって?.. そうだ、ハインリッヒ。しかし私はもっと別のものでもあった。人々からはそのことで呼び名をもらった。私にはまだあとほんの少しばかりそのかけらがある」(Dein Vater?... Ja, Heinrich! - Aber ich war noch etwas anderes - die Leute nannten mich danach - nur ein Stück noch habe ich davon behalten...) ⁹⁾と断わっている。ハインリッヒはそれまでに勤務先の金を使い込んだり、事業に失敗するなどしてカルステンに損害を与えているが、この最後の場面では父親としてよりも、後見人としての業務に対する過度の忠実さ、厳格さがハインリッヒを見放すもととなっており、ひいては息子を死に追いやる父親としての罪の一つになっていると言える。

IV

次にハインリッヒの両親、すなわちカルステンとユリアーネの結婚について見てみることにする。

カルステンは船員向けのウール製品や衣料品を商う小市民の出であり、代々伝わる家と家業を受け継ぎ、さらに後見人としての仕事が忙しくなるにつれて商売は未婚の妹ブリグッテにゆだねているが、彼自身もいわば一人の小市民として健全な生活を送っている。これに対してユリアーネは、前で既に述べたように、投機業者の血を受け継いでおり、カルステンたちのような市民生活とはかけ離れた生活を過ごしている。ユリアーネは父親の死後、喪に服している時でさえダンスにうつつをぬかしたがつている。このように小市民の代表とも言えるようなカルステンと、父親を亡くした後苦勞をするよりも安全な逃げ場を求めているユリアーネの不釣りあいな2人が結婚をすることになる。40歳のカルステンは、自分の人柄から見ても、年齢的に見ても望むことが出来ないほどの若くて美しい妻ユリアーネを得て大いに喜び、妻の言いなりになるほどである。ハインリッヒを死に追いやった父親としてのカルステンの2つ目の罪は、ユリアーネとの釣りあいのとれない結婚をしたことである。

作者シュトルムは自分の息子たちに向けて詩『私の息子たちに』(Für meine Söhne)¹⁰⁾を書き、人生をいかにして送るべきかを説いている。この第4節では次のように書かれている。

どう見ても 嫁にほしいとは思えない
娘がいる家庭には、
客として招かれてゆくほど安っぽい
人間ではないという 顔するがよい。¹¹⁾

シュトルムがここで書いている「どう見ても 嫁にほしいとは思えない 娘がいる家庭」とは貴族階級のことであると考えられる。¹²⁾ 貴族は市民社会の一員であるシュトルム家に娘を嫁がせるようなことはしないから、見込みのない求婚なぞしてはいけないと息子たちをいましめている。シュトルムが生きた時代であり、この作品『後見人カルステン』の舞台ともなっている時代である当時の社会においては、貴族社会、市民社会といったように階級的な違いが歴然としていた。そして、まさにこの階級の違いを飛び越えての結婚は非常に困難なものであった。

シュトルムの別の作品『水に沈む』では、貴族の娘カタリーナと相思相愛になった画家のヨハネスの2人の関係が主題となっているが、身分が違って結婚することが出来ないと感じたヨハネスは画家としての修行の旅に出る。数年後、ヨハネスは牧師の妻となっているカタリーナと再会するが、その間に、2人の子どもであり父にちなんでヨハネスと名付けられた子どもが水に溺れて死んでしまうという悲劇をもたらしている。このように、作者シュトルムにあっては、身分の違いによる恋愛や結婚はうまくいくものとは考えられず、悲劇をもたらすものでしかないのである。そして、カルステンとユリアーネの結婚もその一つである。

V

次に息子のハインリッヒに焦点をあててこの悲劇を考察してみる。

ハインリッヒは母親のユリアーネがハインリッヒを出産後すぐに死亡したために父親カルステンとその妹のブリギッテの2人に育てられる。ユリアーネの死によっていわば一時の迷いからさめたカルステンは、以前にも増して物わかりが良く、しかもしっかりと落ち着いて物事を考えるようになっており、後に残されたハインリッヒを育てる。ハインリッヒは身体的にも精神的にも美しい母親を受け継いでいるが、このハインリッヒをカルステンは心を鬼にして、厳しく育てている。子どもを叱る時にも、驚いて見上げる子どもを優しく抱き寄せることなく自分を抑えている。ハインリッヒはこのように甘やかされることなく厳しく育てられる。人間の人格形成においては自分の育ってきた生活環境が大きく影響を及ぼすものであるが、ハインリッヒの場合に生活環境と遺伝の関わりをとってみると、母親を通して流れる血、すなわち遺伝がその性格に強く影響を及ぼしているように作者シュトルムは描いているととらえることが出来る。

ユリアーネの父は投機業者であり、事業に失敗して自殺をするなど、いわゆる市民的な堅実さが無いのであり、こうした点がユリアーネに流れた血を通してハインリッヒにも伝わっている。父親のカルステンが内向的であるのに対して、ハインリッヒは母親に似て外向的な性格であると言える。外向的な性格の場合、一般に社交性があり、他の人や外界に対して強い関心や興味をいだくことから、こうした性格の否定的な面として、周囲の影響を受け、そうしたものに左右される傾向が強い。また、自分自身の独自の考えをつ

らぬくよりも、他の人の意見に同調することが多くなるし、さらには、反省や熟慮が足らず、ものごとを衝動的にする傾向にある。ハインリッヒには、まさにこの性格の否定的な面が強く出ていると言える。

ハインリッヒは学校を卒業後商人見習いになっているが、かつての母親と同じようにいろいろな場所に如才なく出入りし、軽率な生活を送っている。叔母のブリギッテはしばしばハインリッヒのことで泣くほどであるし、カルステンも夜中にベッドに入っている時などに不安にさいなまされる。

ハインリッヒは勤務先の集金の金を遊びで使い込んでしまう。この時には、8歳で孤児となってカルステンに引き取られ、ハインリッヒと兄妹のようにして育てていたアンナが自分の財産で助けようとするし、カルステンも弁済をしようとするが、受け取ってはもらえない。このような不名誉をしでかした息子は「立派な家」(das ehrenwerte Haus)¹³⁾を出ていかなければならない。カルstenは他の土地での息子の仕事を捜すためにキールとハンブルクあての2通の手紙を書く。ハインリッヒは父のハンブルクの友人の世話で、その小さな店で働くことになるが、安い給料ではやってはいけないとばかり、カルステンに金の無心ををすることもしばしばであった。クリスマスに家に戻るという約束をすっぽかしたハインリッヒからは、友人と商売を始め、金の儲け方がわかったという旨の手紙が届く。

クリスマスが過ぎて数カ月が経った聖霊降臨祭の日の午後、出張の途中ということでハインリッヒが家に戻ってくるが、カルステンにはハインリッヒがしっかりと仕事をしているように見え、満足そうな表情をする。しかし、そのしばらく後に、ハインリッヒからも他者からも手紙が届き、「だらしない息子をもったバカ」(der Narr mit seinem liederlichen Jungen)¹⁴⁾とうわさされたカルstenは自分の財産のほとんどとも言うべきほど多額の金を送り、息子の失敗を償った。このことはアンナやブリギッテには知らされていない。

カルstenはハインリッヒが店を継ぎ、自分の近くに住むことが出来るようにと願って努力をしてきていたのだが、こうした多額の弁済により、経済状態は必ずしも良くはない。こうした折りに、近所の店を買わないかとの話が持ち込まれた。息子が大都市にいたからこそおかしくなったのであり、この小さな町で手元に置いておきたいと思うカルstenはその売りに出た店を買おうと考えるが、金が足りない。またもやハインリッヒのためにアンナが金を出そうとするがカルstenは断わる。しかし、ハインリッヒから求婚の手紙を受け取ったアンナはここで自分の金を使うことになる。アンナの後見人でもあるカルstenは、アンナに息子と結婚して欲しいという父親としての気持ちと、息子の妻になることを勧められないという後見人としての気持ちが入り乱れるが、ここではまだ息子の幸福を無に帰せしめるようなことは出来なかった。そもそも、子供を持ち、親となっている人間の中で自分の子供の幸せを願わない者がいるであろうか。この場合、父親としての情がまさったのであった。

結婚をしたハインリッヒとアンナは商売を始め、ハインリッヒの如才のなさが客を増やすことにもなった。しかし、小商いや商売上の人との付き合いに飽きてきた時に母方の親戚の男と一緒にあって次々と新たな事業に手を染めるが、うまく行かず、カルステンに負担をかけることになる。そしてついにはハインリッヒは、明日は倒産するという嵐の日に、父が管理をしている妻アンナの財産を求めてカルステンのところへ頼みにいく。

息子の度々の過ちや失敗の償いをしてきたカルステンも、ここにきてもう息子を救うことは出来なかった。アンナの財産を渡せば少なくとも一時しのぎにはなるであろうが、カルステン自身が代々受け継ぎ、伸ばそうと努力をしてきた家の没落に直面して、もはや家や家族を守る家長として、父親としての気持ちは無くなり、後見人としての気持ちの方がまさっていた。この結果ハインリッヒは水に沈むことになり、カルステン自身はその様子を見て卒中になる。

VI

次にこの作品の悲劇としての結末を検討してみる。これまで見てきたように、ハインリッヒが多くの失敗の後で父親に見放されて水に沈むということ自体がひとつの悲劇ではあるが、この作品では主としてカルステンに焦点をあててその悲劇性を見なければならぬ。すなわち、カルステンは堅実な市民としての息子を期待したにもかかわらず、息子は失敗を重ね、市民としての生活を逸脱し、ついには息子の死んでいく様子を目撃するにいたる。このことこそがこの作品における悲劇の中心となっているのであるが、悲劇性の度合いを見ると、最後の場面でカルステンはアンナに見守られて生きながらえるのであり、真に悲劇的とは言いがたい。

シュトルムの代表作である『白馬の騎者』のように真に悲劇的なものにするには、ユリアーネを生かし続け、異質な層を代表する2人の結婚生活の中でカルステンを死に至らしめるか、あるいは、杭につかまって父親の名を呼び、助けを求める息子のハインリッヒが水に沈むのを見た時点で、カルステンを死に至らしめるといったような構成が考えられよう。それとも、息子の悲劇的な死を見た後も生きながらえることこそが真に悲劇的であろうか。

自分の息子の死んでいく様子を見て卒中になったカルステンは、その後卒中のために頭がおかしくなっているが、孫の世話をすることは出来る。アンナの美貌は衰えてはいるが、いまでも美しい金髪をしており、以前にはなかったことだが、「彼女の顔からは精神的な美しさが輝いている」(… aber eine geistige Schönheit leuchtete jetzt von ihrem Antlitz, die sie früher nicht besessen hatte.)。¹⁵⁾そして、自分の子どもと子どもに戻ってしまった老人カルステンを左右両側に連れたアンナを見る人は、「肉体が減んでも、魂は生き続けるだろう」(Stirb auch der Leib, doch wird die Seele leben!)¹⁶⁾という聖書の言葉を思い出さざるをえない。カルステンは悲劇を体験したあとに、このようにしてアンナと孫に囲

まれ、穏やかに過ごしている。アンナの「精神的な美しさ」の輝きがカルステンをやさしく包み込み、カルステンに救いを与えているのである。

さらに、カルステンは孫を見つめ、「お前の息子だよ、アンナ、まったくもってお前の子供だ」(Dein Sohn, Anna; ganz dein Sohn!)¹⁷⁾と言って孫の表情の中にアンナのおもかげを認めるが、これに対してアンナは、「そうね、おじいさん、だけどこの子の目はおじいさんの目そのものよ」(Ja, Großvater; aber der Junge hat ganz Eure Augen.)¹⁸⁾と言う。Fasoldは、カルステンの血が孫に流れていることが確信されることにより、祖父カルステンが孫の中であって生き続けることができることが保証され、作者シュトルムや主人公のカルステンが恐れている死に対する恐怖からのがれることも可能となるとみている。¹⁹⁾

このようにしてシュトルムは、この作品の結末において悲劇のあとに一筋の希望となる明りでもって照らしている。しかし、これがこの作品の悲劇としての度合いを弱める結果となっている。冒頭で述べたように、シュトルムは自分の苦悩を作品化することによって解消をはかろうとしている。このような心理状態にあっては、作者シュトルムの姿を代弁しているカルステンを完全な悲劇の主人公に作り上げることが出来ない。シュトルムが真に悲劇的な作品を書き上げるまでにはまだしばらくの時が必要であった。

<テキスト>

Theodor Storm: Sämtliche Werke in zwei Bänden, München 1977.

注をつけるにあたっては、このテキストからの引用は巻数とページ数のみを示す。

<注>

- 1) 父子関係をテーマとした作品としてほかに „Der Herr Etatsrat“ (1880/81), „Hans und Heinz Kirch“ (1881/82) などが挙げられる。後者については、岡山理科大学紀要第26号B (1991) の拙論「シュトルムの『ハンスとハインツ・キルヒ』」を参照されたい。なお、そこではテーマの関係上、本論で取り上げている『後見人カルステン』についても言及しており、若干の重複があることをお断わりしておく。
- 2) Storm an Erich Schmidt. 25. Juni 1877. Theodor Storm-Erich Schmidt Briefwechsel, Berlin 1972, Bd. 1, S. 46.
- 3) シュトルムの他の多くの作品と同様にこの作品も彼の故郷を舞台にしており、カルステンの家はシュトルムの曾祖母の家がモデルになっている。Vgl. Karl Ernst Laage: „Theodor Storm. Studien zu seinem Leben und Werk mit einem Handschriftenkatalog“ 2., erweiterte und verbesserte Auflage, Berlin 1985, S. 45.
- 4) Bd. 1, S. 1018.
- 5) この点については、拙論「テオドア・シュトルムの作品における『水』の役割」, 岡山理科大学紀要第18号B (1983), 11-19ページを参照。
- 6) Bd. 1, S.1013.
- 7) 内向的な性格, 外向的な性格の特徴については、品川不二郎『聞いてください子どもの本音』1989, 企画室を参照。
- 8) Bd. 1, S. 1070.

- 9) Bd. 1, S. 1072.
- 10) Bd. 2, S. 993.
- 11) 藤原 定訳『シュトルム詩集』角川文庫, 135-136ページ。
- 12) 宮内芳明『シュトルムの作品における北ドイツ人的特性』日本大学松戸歯学部一般教育紀要第9号, 1983, 19ページを参照。
- 13) Bd. 1, S. 1032.
- 14) Bd. 1, S. 1049.
- 15) Bd. 1, S. 1077.
- 16) Bd. 1, S. 1077.
- 17) Bd. 1, S. 1077.
- 18) Bd. 1, S. 1077.
- 19) Regina Fasold: „Theodor Storm“ 2., unveränd. Aufl., Leipzig 1990, S. 78.

Theodor Storms „Carsten Curator“

Masaji NISHINO

*Abteilung der Allgemeinen Bildung von
der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama
1-1 Ridai-cho, Okayama 700 Japan*

(Am 30. September, 1991 empfangen)

„Carsten Curator“ ist eine der tragischen Novellen Theodor Storms. Diese Novelle stellt das Verhältnis von dem Vater Carsten und dem Sohn Heinrich dar. Der engbürgerliche Vater Carsten zerstört sowohl die Existenz seines Sohnes als auch sein eigenes Lebensglück des ‚ehrenwerten Hauses‘. Die beiden, der Vater und der Sohn, erleben am Ende einen tragischen Abschluß. Aber diese Novelle ist nicht ganz tragisch, d. h. Storm mildert die Härte des Endes, indem er einen Strahl der Hoffnung leuchten läßt wie bei der Novelle „Hans und Heinz Kirch“. Nach dem tragischen Tod des Sohnes lebt der alte Carsten mit dem Enkel und dessen Mutter Anna, die ‚eine geistige Schönheit‘ hat. In dem Enkel Heinrich findet Carsten sich selbst wieder, und, wie Fasold hinweist, im Enkel ist ein Weiterleben des alten Carstens verbürgt.